

天草崎津における漁村景観の保全に関する研究

Study on preservation of landscape of fishing village in the Sakitu district of Amakusa city

熊本大学工学部環境システム工学科

川崎 健史

1. はじめに

熊本県天草市河浦町崎津地区は羊角湾に面した小さな漁村である。昔は漁業で賑わっていたまちである。しかし、現在では原油の高騰や、後継者不足により衰退の一途を辿っている。それと共に、崎津の昔ながらの漁村景観が失われつつある。本研究では、失われつつある漁村景観を今後も保全していくために過去と現在の漁村景観を比較し、その変容を整理する。変容を整理することで、崎津の特徴を表す景観構成要素を抽出し、それぞれの人々の生活・生業との関連を分析する。

2. 崎津における漁村景観の特徴の整理

景観構成要素について整理すると、昔は存在したが、現在残っていない要素は、産業の変化による住民の生活の変化によって、失われてきたと考えられる。しかし、栈橋の一種であるカケと、家と家との間の路地であるトウヤについては、昔から存在しており、現在その姿を変えてはいるが、まちに多く分布している。これは崎津の地形的特徴や生活文化が関係していると考えられる。

3. カケに着目した漁村景観に関する考察

カケは、山が集落の背後にあり、その前方に海が広がり、集落が密集せざるを得ないという漁村における地形的制約から成立したと考えられる。カケと漁業との関連を見てみると、漁師によって様々な利用がされていることが確認できた。また、漁業に従事していない人にもカケは利用されているが、そのカケはベランダと変わらない姿に変わっている。昔は、現在のカケより大きなものが存在し、その上でチリメンジャコを干すなどしていた。これらのことから、カケは漁業に対して果たしている役割が大きく、崎津の漁業を象徴するものであることがわかった。

4. トウヤに着目した漁村の生活に関する考察

カケとトウヤの分布、家の戸口の位置を図1に示す。分布調査から、戸口の多くはトウヤに向けて設けられており、トウヤの延長線上にカケが多くあることが確認できた。ヒアリング調査から、人々のトウヤ上での活動を把握した。これらより、トウヤは通路としての役割とは異なる、人々の交流活動における役割があることが確認できた。トウヤには人々が生活を円滑に進める役割があると考えられる。これより、トウヤは崎津の人々の生活を色濃く表したものであることがわかった。

5. おわりに

カケは漁村の生業である漁業、トウヤは漁村の生活がか

たちとして表れたもので、崎津の漁村景観を保全していく際に注目すべきものであることがわかった。

謝辞

本研究を進めるにあたり、天草市教員会の方々には資料提供や調査の手助けをしていただいた。また住民の方々には調査にご協力していただいた。ここに深く感謝の意を表す。



図1 トウヤ・カケ・戸口位置関係図（筆者作成）